

ノ差ナク結局「企業ニ要スル伐木、交通、運輸ノ施設ヲ許ス」コトニ落着セリ
但シ我無線電信ノ歸屬及使用問題ニ關シテハ交渉ノ中途ニ問題トナリ遂ニ後日ノ商議ニ讓レル
コト現業保存繼續ニ關スル部ニ述ブル處ノ如シ

第五章 現地事業ノ經過概要（附試掘調査一覽表）

本章ニ於テハ専ラ油田現地事業ノ計畫實施ニ關スル概況ヲ述ベ以テ前各章ニ於ケル行政的沿革
ノ参照タラシメントス而シテ大正八年度以前ニ於ケル官民ノ調査事業ニ付テハ既ニ第二章ノ
記述ニ含マレアルヲ以テ本章ニハ大正九年度以降ノ分ニ限ルコトトシ又地質調査ノ詳細ハ各其
ノ報文ニ明ナルヲ以テ此處ニハ省略ス 尙坑井掘鑿ニ關スル年月ニ付テハ右地質調査報文ト海
軍省ノ文書（毎年度事業方針決裁文書又ハ北辰會報告等）トノ間ニ多少一致セザルモノアリ而
シテ本章ノ記述ハ海軍省ノ文書ニ依レリ

海軍自ラ油
田調査ニ進
出シテ北辰
會ヲ援助ス
ルコトトナ
シ（大正九年
度）
ノ事業

大正九年北樺太軍事占領後第三章ニ記述スル如キ経緯ヲ以テ同年度以降海軍自ラ臨時軍事費ヲ
支出シテ調査ニ着手シ以テ北辰會ノ事業ヲ補助指導スルコトトシ其試掘作業ハ之ヲ同會ニ委託
セリ而シテ北辰會自身モ亦相當經費ヲ投ジテ事業ニ協力セル次第ナルモ大正九年度以降ノ現地
事業ハ事實上海軍ヲ中心トシ且其指導ノ下ニ施行セラルルコトトナレリ
而シテ大正九年度ニ於テハ軍事占領後時日充分ナラズ季節ノ關係モアリテ新計畫ノ準備整ハザ
ルタメ不取敢前年北辰會ニ依リ着手シ大正九年一月以來中止セラレアリシチャイオ（バターシ

ン) 及又イオニ於ケル各一井ノ網掘試掘ヲ再興スルニ止メ同年八月準備作業ニ着手バターシン
ハ翌九月開坑、又イオハ同十一月ヲ以テ開坑セリ
尙ホ大正八年チヤイオニ建設セル三吉無線電信ハ大正九年春暴徒ノタメ破壊セラレシヲ以テ我
軍事占領後復舊(六吉) 裝備セリ

大正十年度
ノ事業

大正十年度ニ於テハ地質調査及試掘共ニ廣クスタヘ一フ鑛區以外ニモ及ビ北樺太油田調査上顯
著ナル進出ヲナセリ蓋シ此際速カニ各地ニ涉リ油田價値ニ關スル見當ヲツケ以テ將來ニ資セン
トスルノ主旨ニ依ルナリ

地質調査
(大正十年度)

地質調査ニ關シテハ別表ニ掲グル如ク農商務技師小林儀一郎、同、北條敬太郎、同、植村葵已男、
同、門倉三能等ヲ海軍省囑託トシ是等諸官ヲ各首班トスル四隊ノ調査隊ヲ派遣シ大正八年度ニ
於ケル油田調査ヲ更ニ精細ニ補足センコトヲ期シ且ツ西海岸炭田ヲモ調査セシメタリ此調査ニ
於テ又トウ背斜軸ハ北方クライドラニイ川ニ南方ハワール川ニ達スルコト又イスキー瀨ニ臨メ
ルウエニー油田ニ於テハウエニー川ヨリ南方シジャン川ニ至ル間ニ一背斜軸ヲ發見シ又エハビ
背斜軸ハ南方オロイ川ニ達スルコトヲ知ラレタリ又北辰會ニ於テモ神谷、岩崎、内藤等各技師

試掌作業
(大正十年度)

ノ率サル調査班ヲ派シノグリツク、ウイグレツク、カタンケリ地方及ゴロマイ川以北ポロマイ
川ニ達スル地域ヲ調査セリ右ノ外海軍ハ別ニ清水機關大尉(獎)ヲシテ西海岸炭田ヲ稻石機關
大尉(正雄)ヲシテ東海岸油田調査ニ從事セシメタリ
試掘事業ニ關シテハ大正十年五月不取敢左記覺書ノ通前年來ノ二井ヲ繼續スル外新ニ二箇所ニ
ダイヤモンドボーリンヲ行フコトトシ又更ニ廣ク各地ニ涉リ急速概査ノ目的ヲ以テ上總掘ニ依
ル多數ノ淺層試掘ヲ計畫シ同年六月海軍大臣ノ決裁ヲ得タリ

覺 (大正十年五月十七日)

大正十年二月二日付覺書ニ對スル北辰會ノ答申其他ニ基キ大正十年度北樺太油田調査事業ヲ豫
定スルコト左ノ如シ

一、現在工事中ノ二井ハ極力掘進ヲ促進スルコト(南方井現在深度一〇八間、北方井現在深
度六一間、)

一、北辰會ヲシテダイヤモンドボーリングヲ二ヶ所ニ實施セシムルコト

但シ地點ハピリツン及カタンケリ附近ト豫定シ尙地質調査ノ上確定スルコト

一、以上ノ通工程ヲ進ムルトシ海軍ヨリ支出スル經費約百二十五萬圓北辰會ハ約八十七萬圓ヲ負擔スベキコト

一、經費ハ更ニ調査シ充分節約スルコト

(註) 大正十年二月二日海軍次官ハ北辰會理事ヲ招キ大正十年度作業計畫ノ提出ヲ求メ海軍ハ油田調査費總額百四十萬圓ノ中ヨリ地質調査ニ要スル若干ヲ控除シ殘餘ノ全部ヲ供提スル豫定ナル旨ヲ達シ其覺書ヲ交付シ後同會ヨリ事業計畫ヲ答申シ之ニ基キ本文ノ如ク詮議セラレタルナリ

仰 裁 (大正十年六月十日官房機密第一五〇一號決裁)

本年度北樺太油田調査作業ハ本年五月十七日附決裁覺書ノ通ニ候處右ハ廣濶ナル油帶ノ内僅ニ中南ノ一部ニ局限セラレ全般ヲ通ジテ尙不足ヲ感ズル次第ニ付此際可成早ク北樺太油田ニ付相當程度ノ價值ヲ確認スル見込ヲ以テ左記要領ニ依リ淺層試掘ヲ施行セラレ可然哉
右仰高裁

左 記

- 一、東海岸有望地ニ合計十井ノ上總掘式淺層試掘ヲ行ヒ深度百間ニ達セシムルヲ標準トシ本年七月掘鑿開始十月末迄ニ作業ヲ終了ス
- 二、試掘井位置ハオハ二井エハビ二井ヒリツン二井又トオ二井ウキニ以南二井ト豫定シ將來企業土地質竝油層檢認ニ便ナル部ヲ撰定スルモノトス
- 三、右作業全部ハ之ヲ北辰會ニ委託ス所要經費ハ大約五十萬圓ト豫定シ其ノ半額二十五萬圓ヲ海軍省ヨリ支出シ殘額ハ北辰會ニテ負擔スベキコト
- 四、本作業實施ニ要スル從業員、機械器具糧食需品等ヲ内地港灣ヨリ北樺太迄輸送スルニ要スル海上輸送ノ費用ハ前項費用ノ範圍外トシ海軍徵備船腹ヲ利用ス 從業員引揚トキ亦同ジ
- 五、完成後ノ各試掘井及同井ヨリ出油アル場合ニ於テハ何レモ北辰會ヲシテ便宜之ヲ處理セシム
- 六、本作業用トシテ發動機艇參隻……………及檣艇參隻ヲ北辰會ニ貸與ス
但シ本船艇ハ農商務省ニ囑託シタル地質調査班ノ調査用ニ兼用ス

(終)

而シテ大正十年度試掘事業實施ノ狀況等概ネ左ノ如シ

チヤイオ及ヌイオノ機械井ハ前年度ヨリ繼續中ノ處地質軟弱作業困難ヲ極メ前者ハ約百二十三間後者ハ約百六十九間(三十二間ノ邊ニテ日産數石ノ油層ニ會ス)ニシテ既ニ最小經管四吋(初十二吋)ヲ用ユルコトトナリ前途掘進困難ニ付之ヲ廢止シ本年度ノ地質調査ノ結果ヲ見テ一層有望ノ地ニ移シテ行フコトトセリ(後研究ノ結果チヤイオノ分ハヌトウニヌイオノ分ハカタングリニ移スコトトナレリ)

ダイヤモンドボーリングハ瑞典金剛石試錐機會社型(クレリヤス式)機械二台ヲ用ヒ外人技師ヲ聘シカタングリ及ピリツンニ於テ標準深度二千尺ノ豫定ヲ以テ着手セリ油田試掘ニダイヤモンドボーリングヲ利用セルハ蓋シ始メテノコトニシテ掘進迅速ナリシガ開坑後間モナク冬期ニ及ビ一先ヅ休止セリ

上總掘ニ依ル淺層試掘ハ前記計畫ニ從ヒ標準深度百間トシオハ、エハビ、ピリツン、ヌトウニ各二井、ノグリツク、カタングリニ各一井ヲ追加シ合計十二井トセリ

右十二井ノ中オハノ三井ハ何レモ有望ナル出油ヲ見合計日産約百石ヲ得タリエハビ及ヌイオノ一井モ少量ノ出油ヲ認メ他ノ七井ハ油層ニ會セズシテ止ミタリ

オハ上總掘
出油
十六
年正

斯ノ如ク大正十年度ノ油田調査ニ於テオハ區域ノ最有望ナルコトヲ確ムルヲ得同地ニ三吉無線電信ヲ建設セリ

而シテチヤイオノ既設六吉無線電信ハ十一年一月失火ノタメ使用不可能トナレリ(同年八月復舊ス)

大正十一年
度油田調査

大正十一年度ニ於テハ更ニ臨時軍事費油田調査費百五十萬圓ヲ以テ前年ノ成績ニ徴シ左ノ通實施ノコトニ大体計畫ヲ定メタリ

- 一、オハ、カタングリ及ヌトウノ三ヶ所ニロ式綱式、混用ノ鑿井各一ヲ行フコト
- 二、ウイグレック及ピリツンニ金剛石試錐井各一ヲ行フコト
- 三、オハ其他ニ上總掘三坑ヲ掘鑿スルコト
- 四、九年度ヨリ着手ノボアターシン及ノグリツクノ綱掘井各一ヲ廢井トス
- 五、十年度ニ施行セル上總掘ハオハニ於ケル出油三坑ノ外全部廢井トス
- 六、更ニオハ方面ノ地質調査ヲ行フ

右ノ大体計畫ニ基キ大正十一年度ニ於テ實際施行セル作業ノ概況左ノ如シ

オハロ式井
出油
十六
年正

オハロ鑛場 初メテロータリー式掘鑿ヲ以テ此地ニ本格的試掘ヲ行フコトナリ大正十一年三月及四月ノ兩度碎氷船ニ依リ先發従業員ヲ亞港ニ送り同地ヨリ陸行セシメ道路ノ開鑿、櫓材料ノ伐採等晝夜兼行準備ヲ進行セシメ七月中旬事業地ヘノ直接航海可能トナルヲ待チ（當年ハ流水多ク航海可能季節例年ニ比シ約一ヶ月遅延セリ）初航船ヲ以テ人員及機械材料等ヲ現地ニ送リシガ之等従業員ハ非常ノ活動ヲナシ諸種ノ建設工事ヲ進メ材料等陸揚後二ヶ月ヲ出デズシテ早クモ九月十五日□式井ノ運轉ヲ開始スルニ至レリ蓋シ前年ノ調査ニ依リ此地ノ極メテ有望ナルヲ認メ會社側ニテモ多數ノ人員ヲ送り従業員亦意氣大ニ揚レルニ依ルモノナリ而シテ右□式一號井ハ九月十五日開坑後深度百二十間ニテ十月六日出油セシガ引揚期切迫シテ掘進ヲ中止セリ此間三回油層ニ逢着ス

當時日産二百石ト推定セラレタリ
上總第四號井ハ八月一日開坑深度二十九間餘ニ達シ之亦引揚ノタメ中止セリ
エハビ鑛場

上總一號井、前年開坑ノ分ヲ掘下深度百十三間餘ニ達シ十月中止ス此間二十四間餘四十六間ニ出油アリ

上總三號井、本年八月開坑深度三十七間餘十月中止 此間三ヶ所ニ滲出油アリ

ピリツン鑛場

ダイヤモンドボーリング前年開坑ノ分本年掘下ヲナシ深度百十三間餘ニ達セシトキ掘鑿管ヲ切斷シ更ニ脇掘ヲ開始シ百三間餘掘進セシモ引揚期ノタメ元肌ニ至ラズシテ十月中止此間五ヶ所ニ滲出油アリ

又トウ鑛場

□式一號井、本年一月ヨリ冬營従業員ヲ以テチヤイオ鑛場ノ設備ヲ此地ニ運搬移轉セルモノニシテ本井ハ八月開坑翌年ニ繼續セリ

ウイグレットク鑛場

ダイヤモンドボーリスグ、カタングリヨリ冬營期間ニ移轉セルモノニシテ七月開坑十月深度九十八間餘ニ達シタルトキ崩壞ノタメ掘鑿管ヲ切斷シ脇掘ヲ初メ深度九十七間餘ニ掘進セシモ引揚期トナリ元肌ニ達セズ十月中止セリ此間十九間餘ニ滲出油アリ

カタングリ鑛場

□式一號井、冬營従業員ヲ以テヌイオ鑛場ノ諸設備ヲ此地ニ移轉セルモノニシテ七月開坑

深度十七間餘乃至二十五間餘ノ間ニ日産約二十石ノ油層アリ其儘掘進十一月深度三百八十一間ニ達セシガ鐵管切斷ノタメ中止ス

上總二號井、本井ハ右口式一號井ニ於テ見タル淺層油採取ノ目的ヲ以テ十月開坑冬營續行三十一間以下ニ日産五石ノ出油アリ

上總三號井、給水ヲ得ル目的ヲ以テ大正十二年三月下旬開坑翌年度ニ及ビ四月、十七間餘ニテ中止ス此間日産十石ノ油層ニ會ス

又小林農商務技師以下ノ一隊ヲ派遣シオハ地方ニ就キ更ニ地質調査ヲナサシメ稻石機關少佐モ亦北辰會事業監督ノ旁ヲ同方面ノ地質調査ニ從事セシガ之等調査ノ結果オハニ良好ナルドーム構造ヲ認メ且オハ以北ニ良好ナル地域ナキコトヲ報告セラレタリ

斯ノ如ク大正十一年度ニ於テハオハ其他各地ノ事業モ着々進行シ就中又トウ、カタンダリ兩鑛場ハ冬營シテ作業ヲ繼續シ又海軍ヨリモ稻石機關少佐ヲシテ現地ニ越年事業ヲ監督セシメタリ而シテ當時ノ北樺太ノ現狀ニ於テハ之等機械材料ノ運搬ニ多大ノ努力ヲ要セル次第ニシテ大正十一年北辰會報告ハ以テ其頃ノ狀況一般ヲ窺知スルニ足ルベキニ付參考ノタメ之ヲ拔萃摘要スルコト左ノ如シ

鑛場 移 轉

大正八年以來掘鑿セルチヤイオ、又イオノ兩坑井ハ地層崩壞甚シク掘進不能トナリタルガ偶々昨年度本社ノ地質調査班ニ依リ他ニ有望ノ地點ヲ發見シタルヲ以テ政度ノ指揮ヲ仰ギ客年十二月下旬遂ニチヤイオハ又トウニ又トウハカタンダリニ移轉シ且更ニ各所ニロータリー機ヲ裝置スルニ決定セリ依テ本年(十一年)一月早々移轉準備ニ着手シ同月下旬之ヲ完了セルヲ以テ一月三十日ヨリ移轉ヲ開始セリ時恰モ寒氣凜冽加フルニ積雪多ク吹雪烈シキ爲メ容易ノ作業ニアラザルモ本作業ノ成否ハ本年ノ事業ニ至大ノ影響ヲ及ボスヲ以テ就業員ヲ督勵シ之ガ完成ヲ期セリ其概要左ノ如シ

(一) 又トウ鑛場

A 運搬線路 バターシンヨリハンツーサーヲ經テチヤイスキ灣及小ガルマイ川ノ氷上ヲ溯リ小ガルマイ仲繼所ヲ經テ又トウ新鑛場ニ達ス此線路ハ距離拾貳里ニシテ一日ニ往復スルコト能ハザルヲ以テバターシンヨリ仲繼所迄八里ノ間ヲ第一期運搬區域トシ仲繼所ヨリ又トウ迄四里ノ間ヲ第二期運搬區域トシ運搬ヲ開始セリ然ルニ第一期運搬區域ハ往復十四時間ヲ要シ人馬孰レモ非常ニ疲勞シ永續シ難キ爲メ其後バターシンヨ

リ山越ニテ七里ノ間ヲ新鑛場ニ直接運搬スルコトトシ三月初旬荒雪道ヲ造リ運搬ヲ開始セルニ最初ハ積雪馬腹ヲ没シ頗ル困難ナリシモ漸時道固マリ一日ノ往復可能トナリ大ニ進捗セリ然ルニ四月ニ入り急ニ氣温昇騰セル爲メ雪融途中地盤露出箇處ニハ毎日雪ヲ散布シ夜中運搬ヲ開始シ毎夜十二時出發翌日正午迄ニ歸ルヲ例トセリ斯ノ如クシテ五月三日運搬不可能ニ至ル迄運搬ヲ續行セリ

B 運搬方法 最初馬橇八台及馴鹿橇五十台ヲ使用ノ見込ナリシモ馴鹿ハ疲勞甚シク連續使用ニ堪エス從テ交替使用ヲ爲サハルベカラサル爲メ日々出役スルモノ豫定ノ半數ニ過ギズ依テ更ニ馬七頭ヲ購入シ之ヲ補足セリ

C 運搬物竝ニ其重量概左ノ如シ
ロータリー式機械及鐵管共一式 約六萬貫
ホイラー附屬品 約千二百貫
粘土 約六千貫
煉瓦 約千八百貫
食料物資 約六千貫

其他ノ物資 約三千貫
建築材料板類 約五千貫
櫓材 約二千七百貫
計 約八萬五千七百貫

(二) カタンダリ鑛場

A 運搬線路 又イオ鑛場ヨリ山道ウキゲレックヲ經テカタンダリニ到ル線路ニ依ルコトニセリ此線路ハ距離四里ニシテ森林地帯ノ山間ナルヲ以テ積雪多ク最初ハ積雪馬腹ヲ没シ一日ノ往腹困難ナリシモ漸次道固マリ往腹可能トナリ運搬大ニ進捗セリ然ルニ四月ニ入り急ニ溫度昇リ雪融ケノ爲メ運搬非常ニ困難トナリタルヲ以テ中旬ヨリ夜中運搬ヲ開始シ五月九日運搬不可能ニ至ル迄之ヲ繼續セリ
B 運搬方法 馬橇七台及馴鹿橇五十台ヲ使用ノ見込ミナリシモ豫定ノ如ク集ムルコト能ハズ且馴鹿ハ疲勞早ク連續使用ニ堪エザルタメ豫定ノ半數ヲ充タスニ過ギザリシモ幸ニ馬橇ノ能率良好ナリシ爲豫定ノ成績ヲ收ムルニ至レリ
C 運搬物竝ニ其重量概算 前記又トウ鑛場ト大差ナキヲ以テ之ヲ省略

(三) ウィグレック鑛場

ヌイオ鑛場ヲカタングリニ移ス結果ガタングリノダイヤモンド鑛井鑛場ハ之ヲウィグレックニ移スコトニ決定シタル爲メ其鑿井機械附屬品櫓其他ノ諸材料ノ運搬モ亦前記カタングリ鑛場ノ運搬ト同時ニ之ヲ行ヒ五月迄ニ之ヲ終了セリ

以上ノ三鑛場ノ移轉作業ハ冬營者百十八名ノ外土人延數三千二百四十五人ヲ使用シ之ヲ行ヘリ

事業地ニ於ケル運搬ノ狀況

一般物資ハチャイオニ全部陸揚ヲ爲シ之ヲ各鑛場ニ分配ス但シオハハ遠距離ナルヲ以テ内地ヨリ直送セリ而シテ之ガ輸送ニハ補助機關付帆船金萃丸並ニ多數ノ小形發動艇及大解船平田船川船等ヲ使用セリ

○オハ鑛物 オハ鑛場ハウルック灣口ニ陸揚シ夫ヨリ灣内約一里半發動艇ヲ利用シテ運搬シ仲繼所棧橋ニ到リ同所ヨリ軌道ニ依リ約一里餘リニシテ鑛場ニ達ス同灣内ノ運搬ハ滿潮ヲ俟チ之ヲ行フ其時間ハ一日(晝又ハ夜間)ノ内約六時間ニ過ギズ

○エハビ鑛場 エハビ鑛場ハエハビ灣口ニ陸揚シ夫ヨリ灣内約一里ニシテ仲繼所ニ達シ同所ヨリ陸路十丁ニシテ鑛場ニ達ス同灣内ハ本年水深極メテ淺ク解船ノ航行タニ困難ナリ

○ピリツン鑛場 ピリツン鑛場ハキヤクル灣口ヨリ同灣内約四里ニシテピリツン河口ニ達シ同河口ヨリ湖上十八里ニシテ鑛場ニ達スピリツン河口ヨリ約一里手前ノ地點迄ハ發動艇航行可能ナルモ該地點ヨリ上流ハ水深極メテ淺キヲ以テ手押ノ小舟ニ依ル外ナク往路少クモ五日ヲ要シ交通極メテ困難ナリ

○ヌトウ鑛場 ヌトウ鑛場ハチャイオ海岸ヨリチャイスキー灣北方約五里ノ小ガルマイ川口迄ハ發動艇可能ナルモ夫ヨリ約一里半河川ヲ手押ノ小舟ニ依リ湖リ仲繼所ニ達シ夫ヨリ陸路三里ニシテヌトウ鑛場ニ達ス該道路ハ昨年及本年ニ亘リ開鑿セルモノニシテ馬車運搬可能ナリ

○ウイングレック鑛場 ウィグレック鑛場ハヌイオ海岸ヨリ四里湖上グリック仲繼所迄發動艇ニ依リ夫ヨリ陸路約三里ノ内一里半ハ馬車運搬ニ差支ナキモ他ノ一里半ハツンドラ地帯ナルヲ以テ馱馬又ハ人力ニ依リ運搬ス

○カタングリ鑛場 カタングリ鑛場ハナビリ灣ヨリカタングリ湖ヲ經テ鑛場ニ達スナビリ灣

ノ内中途迄二里ノ間ハ發動艇ヲ通ズルモ其ノ餘ノ五里半ハ航行困難ナルヲ以テ手押川舟又ハ丸木舟ニ依リカタングリ湖岸迄運搬シ更ニ約半里ノ間陸上ヲ運搬ス

(終)

大正十二年
度油田調査

大正十二年度ニ於テハ前年度ノ成績ニ徴シ最モ確實有望ナルオハ油田ノ調査開發ニ多クカラ注グコトトシ左ノ覺書ニ基キ作業ヲ計畫セリ

大正十二年度油田調査專業覺(大正十二年二月)

大正十二年度北樺太油田調査ハ本年度調査ノ成果ニ鑑ミ主トシテオハ區域ノ調査ヲ速成スルノ方針ヲ以テ左ノ要領ニ依リ計畫實施セントス

一、オハ油田ノ調査

- (イ) 本年度ニ於テ出油ヲ見タルロ式試掘井ヲ繼續シ深掘ヲナス
- (ロ) 新ニ綱掘機械三台ヲ以テ三個所ノ試掘ニ着手ス
- (ハ) (イ)(ロ)合計四個所ノ試掘ハ之ヲ終了スルニ從ヒ該鑿井機ヲ順次別ノ位置ニ移シテ新ニ試掘井ヲ設ケ全年ヲ通ジテ繼續スルモノトス

二、ヌトウ及カタングリ油田ノ調査

- (イ) 地質ノ精細調査ヲ行フ
- (ロ) 現ニ施行中ノロ式試掘井ヲ繼續スルコト但シ十二年七月頃マデニ終了ノ見込ニシテ若シ相當出油アルトキハ其ノ狀況ニ依リ別ニ試掘ノ計畫ヲ立ツ 出油ナキ場合ニハ前項地質調査ノ結果ヲ待テ適當ノ計畫ヲ立ツルモノトス
- 三、金剛石試錐ハ之ヲ中止ス
- 四、上總掘試掘ハ作業燃料ノ採取ヲ要スル等特別ノ必要ナキ限リ之ヲ行ハズ
- 五、十二年度油田調査費五〇〇、〇〇〇圓成立ノ上ハ内約五〇、〇〇〇圓ヲ海軍直接所要ノ分トシテ保留シ殘額ヲ以テ北辰會ノ事業請負費及右事業ニ要スル機械類ノ購入費ニ充ツ
- 六、事業監督及調査ノ爲本年同様軍需局職員ヲ現地ニ派遣ス

備考

- 一、十一年度試掘ニ依リオハ油田ニ確ナル出油ヲ見地質調査ノ結果ト共ニ本油田ノ最有望ナルコトヲ知り得タリ依テ更ニ其深サ及廣サ等此區域ニ於ケル油ノ集積狀態ヲ急速探究ス

ルノ必要ヲ認め十二年度調査事業ハ出來得ル丈ケ此地ニカヲ集中スルノ計畫ヲ立テタリ
 二、ヌトウ及カタングリノロ式試掘井ハ現ニ進行ノ途ニ在リ未ダ顯著ナル出油ニ會セザルモ
 同方面ニ於ケル一般兆候ハ相當有望ノモノアルガ故ニ十二年度ニ於テモ之ヲ續行シ尙ホ
 精細ナル地質調査ヲナスモノトス

而シテ右試掘井ハ本年七月頃マデニ終了スベク其成績ト右地質調査ノ結果ニ基キ更ニ爾
 後ノ計畫立ツルコト、ス

三、ピリツン及ウイグレックニ於ケル現在ノ金剛石試錐ハ當初本機ノ運搬經便ニシテ初度施設
 費比較的小ナルコト及地質調査ニ便ナルトノ理由ニ依リ試ミラレタルモノニシテ今日迄
 ノ掘進ニ於テ相當苦心ヲ採取シ目的ノ一部ヲ達シタルモ本試錐地ハ進行ニ伴ヒ地層甚ダ
 崩壞シ易キ爲堪脇ナル技術者ノ不足及機構上ノ關係ト相俟テ掘進益々困難トナリ強テ之
 ヲ繼續スルモ得ル處比較的小ナリ寧ロ有望ナルオハ油田ニカヲ集中スルノ極メテ得策ナ
 ルヲ認め之ヲ中止スルコト、セリ但シ今後各地調査ノ進行ニ伴ヒ金剛石試錐ニ適當ナル
 地質アルトキハ所要ニ應ジ之ヲ再興スベシ

四、從來廣ク有望地域ヲ概査スルノ目的ヲ以テ各地ニ散在試掘セル上總掘井ハ今ヤ第一項ノ

ノ如クオハ油田調査ニカヲ集中シ得ル時期ニ到達セルガ故ニ此際之ヲ廢スルコト、セリ

(終)

而シテ大正十二年度ニ於ケル實施ノ狀況左ノ如シ

オハ鑛場 前記計畫ニ示ス如クオハ油田ノ本格的試掘ヲナスヲ目途トシ航路開通ト共ニ綱式
 裝置三台ヲ送り準備ヲ急行セリ

□式一號井、 前年開坑ノ分ヲ掘進セシガ深度三百七十間餘ニ達セシトキ故障ノタメ中
 止ス此ノ間百六十七間迄ニ油層アリ而シテ本□式裝置ヲ以テ第二號井ヲ掘鑿スルコト、
 シ翌年度ニ至リ大正十三年四月、二號井ヲ開坑セリ

綱式一號井、 十二年八月開坑深度百六十七間油層數八、深度百間以上五層ヲ採油シ初日
 産百七、八十石ナリ

綱式二號井、 十三年八月開坑、深度百三間、百間以上ノ三油層ヲ採油ス 初日産八、九
 十石

綱式三號井、 十二年九月開坑、深度百二十二間餘、出水崩壞等ノタメ十三年三月中止
 綱式五號井、 十三年一月開坑、翌年度ニ繼續ス

又トウ鑛場

ニ於テハ前年度來ノロ式井ヲ繼續シ十二年九月下旬豫定深度五百間ニ達シ掘止トス此間屢々大量ノ瓦斯層ニ會シ且油氣アリ坑井完了當時ノ瓦斯量一晝夜四百萬立方尺後十三年一月ノ概査ニ依レバ瓦斯量、百萬立方呎ニシテ輕油吸收ニ依リ千立方尺ニ付、揮發油一升五合ヲ得ベク又自噴ノ油量アリバラフィン系ニシテボーメ三十九度ナリ

カタングリ鑛場

ニ於テハ前年來ロ式一號井ノ掘管採揚ニ努メシモ意ノ如クナラズシテ中止セリ而シテ次ニ記スガ如ク本年度地質調査結果ニ基キ更ニロ式二號井ヲ試ムルコト、ナリ冬營中之レガ準備ニ着手シ十三年四月ニ至リ開坑セリ

地質調査
(大正十二年)

地質調査ニ關シテハ海軍ヨリ小林農商務技師ヲ派遣シカタングリ地方ヲ調査セシメタル結果カタングリヨリノグリツクニ至ル一連ノ背斜軸中數箇所ニドーム構造ヲ認メタルコトヲ報告セリ北辰會亦池上技師ヲシテ又トウ地方ヲ調査セリ尙海軍ハ福田機關少佐ヲシテエヒビ方面ヲ調査セシメ又當時九州帝國大學修學中ノ榎本機關大尉ヲ派シテ油田調査ニ從事セシメタリ斯ノ如ク今ヤオハ油田ハ愈々採油時機ニ達シタルニ就テハ不取敢本年度ニ於テチヤイオニ在リ

オハ油田ノ
諸施設漸ク
進ム
(大正十二年度)

シ舊クレイノ二千噸タンクヲオハニ移シテ建設シタル外土タンク三個ヲ掘造シ、且ツ従業員宿舍、倉庫、發電室等ノ一般設備ヲ整ヘ又將來ノタメオハ海岸ニ於テ給油管布設方法ニ關シ試験ヲ行ヘリ

尙軍ニ於テモ兵營ヲ新設シテ駐兵セシメアタイムヨリヌイオ、チヤイオヲ經テオハニ至ル軍用電信電話ヲ架設シ北辰會モ亦チヤイオ、オハ間電話線ヲ之レニ添加スル等面目ヲ改ムルニ至レリ

又本年度ニ於テハ福田機關大尉ヲ現地ニ越年セシメ作業ノ監督及諸般ノ調査ニ任ゼシメタリ(註)大正十二年七月、中里海軍省軍需局長橋本北辰會及牧田取締役ヲ同伴現地ヲ視察セリ

大正十三年度ニ於テハ前年度試掘及調査ノ成績ニ徴シ左記覺ノ通計畫セリ

大正十三年三月 官房機密第三七四號

大正十三年度油田調査事業覺

大正十三年度北樺太油田調査ハ本年度調査ノ成果ニ鑑ミ左ノ要領ニ依リ計畫實施セントス

大正十三年
度油田調査

一、オハ油田ノ調査

(イ) 油田北部ニ□式試掘井一個ヲ新掘ス

(ロ) 網掘式試掘井一個ヲ繼續ス

(ハ) 前項網掘式試掘井ノ掘鑿經過順當ナルトキ若クハ掘鑿中止ノ已ムヲ得ザルトキハ更ニ一個ノ網掘式試掘井ヲ新掘セントス

(ニ) 本年度出油ヲ見タル網掘式油井二個ヨリ採油シ出油量試験ヲ施行ス

二、カタンケリ油田ノ調査

本年度地質精査ノ結果ニ鑑ミ□式試掘井一個ヲ新掘ス

三、又トウ油田ノ調査

本年度完成シタル□式試掘井ノ出油及瓦斯ノ數量及性狀調査ヲ行ヒ其成績ニ鑑ミ揮發油採取實驗ヲ行フ

四、地質調査

未施行ナルエハビ、ピリツン間ノ區域ノ地質調査ヲ行フ但シ(省略ス)

備考

五、上總掘試掘ハ作業燃料ノ採取ヲ要スル等特別ノ必要ナキ限り之ヲ行ハズ

六、各試掘井ハ作業ノ狀況ニヨリ冬期間之ヲ休止スルコトアルベシ

七、十三年度油田調査費 四一〇、〇〇〇圓ノ内約五〇、〇〇〇圓ヲ海軍直接所要ノ分トシ

テ保留シ殘額ヲ以テ北辰會ノ事業請負費及右事業ニ要スル機械類ノ購入費ニ充ツ

八、事業監督及調査ノタメ適當ノ時期ニ於テ軍需局其他ノ關係職員ヲ現地ニ派遣ス

一、十二年度試掘ニヨリオハ油田ノ中央部ニ於テ合計四個ノ出油井ヲ發見シ南部ニ於テハ目下試掘中ナルモ北部ニ於テハ未ダ試掘セザルニ付十三年度ニ於テ北部ニ□式試掘ヲナスコト、セリ

十一年度ヨリ引續キ試掘中ナリシ□式試掘井ハ數個ノ油層ヲ發見シタル處十二年十月深度三七〇間ニ達シタルトキ堅硬地層ニ會シ鐵管ヲ折斷シ加之上部ノ地層崩壞シテ鐵管採揚不可能トナレリ結局今後ノ掘進困難ニ付之ヲ中止シ機械ヲ新□式試掘井ニ轉用セントス尙網掘式試掘井二個ハ未ダ豫定深度ニ達セザルヲ以テ十三年度ニ於テ繼續掘進セントス而シテ右網掘式試掘井ノ成績ヲ參照シテ更ニ一個ノ網掘式掘井ヲ新掘セントス

二、カタンダリニ於テ十一年度ヨリ繼續シタル□式試掘井ハ少量ノ出油ヲ見タルモ深度三八
 一間ニテ崩壞性地質ニ遭ヒ一時作業ヲ中止シ本年度地質調査ノ結果ヲ待テ其ノ處置ヲ決
 スルコト、セル處右地質調査ノ結果及試掘ノ實際ニ徴スルニ該井ノ位置ハ地質構造上適
 當ナラザルコトヲ發見シタルニ付十三年度ニ於テハ他ノ適當ト認ムル位置ニ移シ曩ニ使
 用シタル□式機械ヲ以テ新掘スルコトニ計畫セリ

三、ヌトウ □式試掘井ハ本年度ニ於テ豫定深度ニ達シ推定日産約二十石ノ出油ト約百萬立
 方呎ノ瓦斯ヲ出シ此原油及瓦斯ハ何レモ相當ノ揮發油ヲ含有スルヲ以テ是等ノ產出量及
 性質ニ付精細ノ調査ヲ行ハントス

四、エハビ產油地トビリツン產油地ノ間數里ノ地域ニハ相當ノ油徴ヲ存スルモ交通不便ノタ
 メ今迄地質調査未了ノ區域トシテ殘レルニ付之ヲ行ハントス

參 考

十二年 度 作 業 概 要

オ、ハ □式試掘井マケ繼續試掘(十三年三月中止)

網掘式試掘井四ヶ 新掘(二ヶ十三年繼續)

ヌトウ □式試掘井一ヶ繼續試掘(十二年十月完成)

カタンダリ 全 右 (十二年六月中止)

而シテ十三年度ノ實際事業左ノ如シ

オハ鑛場ニ於テハ

□式二號井、 □式一號井ノ機械ヲ以テ四月開坑出油アリ

九月豫定深度五〇〇間濃泥充滿シ休止

網式四號井、 五月開坑九月深度一三一間餘ニテ中止

網式五號井、 前年度ヨリ續行十月、一五二間迄掘進ミ後採油井トス

上總三號井、 五十七間迄掘下ヲ行ヒ採油ス

尙網式一號、二號、兩井ヨリ採油ヲナス

(註) 前年來オハ油田ノ試掘ニ於テ着々好望ナル出油井ヲ得ルニ件ヒ北辰會側ハ兎角採油主
 義ニ傾キ海軍ガ先ヅ油田ノ廣サト深サヲ究メントスル調査主義トハ作業ノ計畫實施上
 一致シガタキ場合アリタリ

斯ノ如クシテ十三年度後半期ニ至テハ主ニ採油ヲナシ全年度末オハ鑛場採油狀況左ノ如シ

□ 式	一號井	二六石
網 式	一號井	三二石
網 式	二號井	一五九石
網 式	五號井	一九石
上 總	二號井	八石
上 總	三號井	一〇石

カタングリ鑛場ニ於テハ

□ 式二號井、四月開坑九月三六二間餘ニテ中止油氣及瓦斯アリ

右ノ外千谷農商務技師（好之助）ヲ海軍省嚴託トシ

バロマイ、ケイドラニ一方面ノ地質調査ヲナサシメタリ

斯ノ如クシテ大正十四一月二十日、日露條約調印當時ニ於ケル各地現状ハ別表試掘調査一覽表ニ示スガ如シ 尙ホ此ノ間北京ニ於ケル日露交渉進行ニ件ヒ現地作業繼續ノ問題ト關聯シテ各試掘地ノ坑井、諸設備等ヲ含ム現業調書ヲ作製會議ニ提出スルコト、ナリ後條約公文ニ添付セラル、ニ至レルコト第四章ニ述フルガ如シ本調書ハ多少現場ノ實際ニ比シ相違スル處アルモ以

地質調査
(大正十三年)

初テオハ産
油ヲ内地ニ
輸入ス
(大正十三年
九月)

テ大体ノ參考トスルニ足ルベシ

時ニオハ油田ニ於テハ前年來ノ採油漸ク概設タンクニ蓄積セラレ此儘ニテハ採油ヲ休止スルノ止ムヲ得ザルニ至ルベキ状態トナレルヲ以テ大正十三年二月官房機密第二〇一號以テ曩ニ大正十一年三月決定「試掘中ノ出油處分ニ關スル覺書」追加(□)ノ二ニ對スル海軍保有油量(第三章記述參照)ノ内約五千噸ヲ元受スルコトニ海軍大臣ノ決裁ヲ經テ同年八月カムチャツカ方面へ出動中ノ驅逐艦ニ對シ行動用トシテオハニ於テ原油約二〇〇噸ヲ搭載セシメタル外翌九月特務艦洲崎ヲ以テ初メテ全原油五二四三噸ヲ燃料廠ニ輸送セシガ當時進行中ノ日露交渉ニ對スル關係モアリ露國ニ對シテハ内密ニ取計ヒタリ

又將來ノ採油貯藏ノタメ大正十三年四月官房機密第五四四號決裁ヲ得テ臨時軍事費營繕費ヲ流用シオハニ(三吉)及チヤイオ(六吉)ニ無線電信ヲ有セシガ勢力不足ニシテ内地ト直接交信ニ適セズ依テ將來現地ヨリ撤兵セル場合ノ通信連絡ヲ確保スル必要上油田ノ中心地タルオハノ無線電信ヲ十二吉トスルコトトシ横須賀工廠ヨリ井上少佐外從業員ヲ洲崎ニ便乘派遣シ八月之ヲ完成セリ

(註) 當時オハニ貯藏シアタル原油ハ引火點攝氏八十度以上ニテ其ノ儘艦船燃料ニ適スト認

メラレタリ又オハニ於テハ何等海岸設備ノ見ルベキモノナク右洲崎（艦長梅田文鹿）ノ荷役ニ對シテモ小形オイルバーチヲ曳航シテ湖内湖口ヲ經テ本艦泊地ニ往復運搬スルノ外ナク加フルニ湖内、湖口ノ水深ニ依リバーチノ出入モ自由ナラザル場合アリテ右バーチニ依ル運搬力モ一日平均約數十噸ヲ出デザル狀況ニ在リキ（當時三十噸積オイルバーチ十隻、發動機船外海用三隻、湖内用四隻ナリ）由テ湖内ヨリ海岸ニ渉ル送油管ヲ臨時急設シ以テ海ニ於テバーチ給油シ得ルコトトセリ斯クテ右應急裝置竣工後ハ漸ク作業ノ進捗ヲ來シ洲崎ハ七月下旬以來滯泊約一ヶ月餘ニシテ載油ヲ了セリ 又前記重油槽工事請負者タル長岡鐵工所従業員ノ如キモ特ニ本艦ニ便乗ヲ許可スル等諸般ノ作業ニ對シ極力援助ヲ與ヘタリ

福田機關少
佐現地引繼
（大正十四
年三月）

大正十三年度末ニ近ク大正十四年一月、日露條約調印セラルルヤ翌二月海軍ハ福田機關少佐ヲ現地ニ派シ三月露國ノ派遣員ト會シ各礦場ニ就キ立會調査ヲ遂ゲ引繼ヲ了セルコト及我守備隊モ露國民警ノ到着ヲ待テ逐次油田地ヲ撤退スルニ至リシコト第三章ニ記述スル處ノ如シ

大正十四年
度油田調査

大正十四年度ニ於テハ既ニ同年五月ヲ以テ日露兩國代表間ニ亞港協定成立北樺太全部ノ行政引渡並ニ占領ノ解除ヲ完了スルニ至リシガ日露條約ノ定ムル處ニ依リ追テ露國政府ト我當業者トノ間ニ利權契約締結セラルル迄ノ間從前ノ現地事業ハ之ヲ繼續シ得ル次第ナルヲ以テ海軍ハ同年度ニ於テモ油田調査費四十萬圓ヲ以テ調査ヲ續行スルコトトセリ但シ近キ將來ニ於テ利權會社ノ設立セラルベキコト定マリテ折柄、右十四年度豫算編成當時ニ於ケル大藏省側トノ諒解モアリ此ノ繼續事業ニ依リ作成セラレタル出油井（日産十石以上）ハ其ノ掘鑿實費ヲ以テ新會社ニ對スル讓渡又ハ貸與價格トスルタメ其ノ評價ヲ簡易ナラシムル必要上從來ニ於ケル人夫供給契約ノ方法ニ依ラズ新ニ掘進深度ニ依リ經費ヲ支拂フ試掘請負契約トシテ利權當業者タルベキ北辰會ニ請負ハシムルコトトセリ 斯テ先ヅ條約ニ依ル利權契約豫定期タル大正十四年十月十五日迄（其後利權契約期ノ延引ニ伴ヒ本試掘契約期間モ十一月三十日ニ延期セリ）ヲ期限トシオハニ於テ上總第一號井（現深度二十二間餘）同第四號井（現深度三十間餘）ヲ網式トシテ約百間迄掘下ヲナサシムルコトニ契約セシガ北辰會ハ漸ク同年十月ニ至リ第一號井ノ掘下ニ着手セリ其後同年十二月ニ至リ石油當業者ト露國トノ利權契約ハ締結セラレタルモ尙新會社ノ設立迄ニハ相當ノ時日ヲ要スベキ情況ニ付更ニ同年十二月北辰會ト契

約オハ上總第二號井(現深度五十一間餘)第三號井(現深度五十七間餘)モ同様網式トシテ大正十四年度末迄ノ間ニ深度百間ニ達セシムルヲ目途トシテ追掘セシメタルガ是等ハ概ネ成功シ大正十五年度初頭ニ於ケルオハ坑況次ノ如シ

オハ坑況(大正十五年四月十日調)

- 式一號 三八石
- 網 式一號 七〇石
- 同 二號 九〇石
- 同 五號 八石
- 同 九號 地均終ル
- 上 一號 二三石
- 同 二號 一七〇石
- 同 三號 八吋管外壓強ク容易ニ揚ラズ管切斷シ作業意ノ如クナラズ
- 同 四號 十三號

又露國側ト交渉ノ上十四年十月洲崎ヲ以テオハ原油約五四〇〇噸ヲ内地ニ輸送セリ(此ノ油ハ

採油費ヲ北辰會ニ支拂ヒ引取リタルモノナリ單價一噸ニ付十七圓五十錢)
右ノ上總井掘下ヲナサシメタル別紙仰裁書ハ當時ノ事情ヲ知ルニ足ルベシ

大正十五年一月 官房機密第一四七六號決裁

北樺太油田調査ニ關スル件

今回北樺太油田ニ關スル利權契約成立ヲ見タリト雖利權會社ノ創立ヲ見ル迄ニハ尙相當ノ時日アルベキヲ以テ別紙理由ニ基キ豫算ノ範圍内ニ於テ本年度末迄北辰會ヲシテオハニ於ケル上總掘二號、三號及四號井ヲ追掘セシムルコトトシ可然哉

別紙

理由、從來北樺太ニ於ケル油田ノ試掘作業ハ海軍ノ直營トシ北辰會ヲシテ事業ノ實施ニ當ラシメタリシガ昨年二月、日露條約成立シ利權ノ基礎確定セリト雖同條約ニ基キ撤兵終了後五ヶ月以内ニ利權契約締結セラレ新利權會社ニ本事業ヲ引繼グ迄ハ依然海軍ニ於テ油田事業ヲ實行スルノ必要ヲ認メ本年度ニ於テモ臨時軍事費殘務費中ニ油田調査費四拾萬圓ノ成立ヲ見

テ内二五七、六九〇圓ニテ同條約ヲ以テ許サレタル範圍内ニ於テ試掘ヲ繼續セシムルコトトセ
 リ然ルニ本年度ノ油田調査費ハ其性質從來ノモノト異ルヲ以テ本試掘ニ支出セシ經費ハ新會社
 成立後直ニ返却セシムベシトノ條件ヲ附セシ關係上北辰會側ハ之ガ使用ヲ躊躇シ昨年十月ニ入
 リ漸クオハニ於ケル上總一號井ノ掘下ゲニ着手セル狀況ナリキ而ルニモスコ―ニ於ケル利權交
 渉ノ結果新會社ノ負擔豫想外ニ重ク會社ノ成立ニ危懼ノ念ヲ抱カシムルモノアリトシテ以テ政
 府トシテモ本企業ニ對シ好意的考慮ヲ拂フコトニ決シ大藏省側モ前記試掘費返却ノ件ニ付テハ
 別ニ考慮スルモ可ナリトノ意向ヲ漏セリ

而シテ又利權會社ノ成立ハ當初豫期ノ如ク速カナル能ハズ本年三月頃迄ハ實現困難ナルベシト
 思料セラルル節モアレバ海軍トシテハ本年度中右豫算ノ範圍内ニ於テ出來得ル限リ掘鑿ヲ實施
 シ出油量ヲ増加セシメ置クコトハ一面帝國燃料油問題ノ解決ヲ速カナラシムルノ一助トモナリ
 又他面利權會社初期ノ缺損ヲ少クシ延テ海軍ニ於テ購入スル油價ヲ低廉ナラシムルト共ニ從來
 數年ニ亘リ支出セシ油田調査費本來ノ目的ニ合致スルノ結果トナルベシ依テ此際深掘ニ依リ出
 油増産ノ見込アル上總二號井三號井竝ニ已ニ追掘契約済ナルモ未ダ掘下ニ着手セザル上總四號
 井以上三井ノ出油見込アル最大深度タル二百五十間程度迄掘鑿スルノ目的ヲ以テ本年度末迄差

當リ百間丈ケ海軍ノ經費ヲ以テ掘下ヲ行フヲ必要ト認ム

備考 (大正十四年十二月七日調)

坑井	現深度	掘進豫定深	掘進費	準備費
上總二號	五一間二尺	一〇〇間	一〇、〇〇〇圓	
同 三號	五七間四尺	一〇〇間	一〇、〇〇〇圓	
同 四號	二九間〇	一〇〇間	一〇、〇〇〇圓	
計			(一間當リ三三〇圓)	
合計			五三、五一五圓	八三、五一五圓

大正十四年
 度地質調査
 露國ノ同意
 フ得ズシテ
 止ム

尙大正十四年度ニ於テハ條約議定書ニ定ムル一千平方露里試掘區域ノ選定資料ヲ得ル爲地質調
 査ニ力ヲ用ユルノ計畫ナリシガ本件實施ニ關シ我駐露大使ヲシテモスコ―政府ニ又芳澤駐支公
 使ヲシテカラハンニ對シ交々交渉セシムル處アリシガ先方ハ右地質調査ニ關シ議定書ニ何等ノ
 規定ナキコト及利權當業者トノ契約モ未ダ決定セザルコト等ヲ理由トシテ之ヲ拒否セル爲遂ニ
 實行ニ至ラズシテ止ミタリ

斯ノ如クシテ海軍ノ油田調査事業ハ大正八年地質調査隊及水路測量班ヲ派遣セシ以來大正十四年度迄繼續セラレタルガ此間是等現業ニ關係セル部外官民ノ中海軍省囑託トシテ勤務セルモノ第三章ニ示スガ如ク何レモ北樺太油田、炭田開發上我海軍ニ多大ノ貢獻ヲナセルモノト認ム又大正七年初メテ久原調査隊派遣以來ノ試掘井竝ニ地質調査等實施一覽別表ノ如シ

(終)

第六章 日露條約後利權會社設立ニ至ル經過概要

(註) 北樺太油田(附炭田)ニ關スル本編纂ハ大正十四年二月、日露條約成立ニ依リ利權ノ基礎確定スル迄ヲ以テ一段落トスルモ尙參考ノ爲本章ニ於テ條約後利權會社設立ニ至ル迄ノ經過一般ヲ記述スルコトトセリ但資料ノ蒐集意ノ如クナラズ後日ノ補足ニ俟ツ處少カラザルベシ就中モスコ―ニ於ケル利權契約交渉ノ經過契約後石炭小企業者ノ成行、現地ニ於ケル政府財産ニ關スル問題等ニ付テハ概ネ省略セリ

大正十四年一月北京ニ於テ日露條約調印セララルヤ政府ハ本條約ニ基ク利權企業ノ創設ニ付詮議ヲ開始シ先ツ左ノ通閣議決定セリ

覺 書 (大正十四年二月九日)

日露基本條約御批准ヲ得タル曉ニ於テハ速ニ政府ニ於テ北樺太油田、炭田ノ開發ニ當ラシムベキ一企業團ヲ指定シ右利權ニ關スル細目協定ヲナサシムベキ心要アルニ就テハ關係各省(大藏、海軍、農商務、陸軍、外務)指導ノ下ニ北辰會加盟實業家竝爾餘ノ有力ナル實業家

企業團指定
ニ關シ閣議
(大正十四
年二月)